奈良日独協会インフォメーション



Neues in Nara

Nr.42 2013年2月15日

Japanisch-Deutsche Gesellschaft Nara(JDG-Nara) 奈良日独協会(会長 河野良文)奈良市大安寺 2-18-1 大安寺内

> Tel/0742-61-6312, Fax/0742-61-0473 http://www.daianji.or/jdgn/index.html

編集委員:林 (hayashi@mercury.sannet.ne.jp) 峯本 (hmine-24@m3.kcn.ne.jp)

"これは会員相互のコミュニケーションツールです。皆様からの情報は編集委員へ"

●行事報告

1. 奈良日独恒例の「クリスマス会」 昨年 12 月 8 日 イタリア・レストラン「ポンテロッソ」にて開催され 大阪神戸ドイツ総領事館からベアーテ・フォン・デ ア・オステンさんにお越し頂き、多数の会員の参加を 得て楽しい会となりました。会の初めに会員の童画作 家中島豊さんが東北支援展覧会の縁で多賀城市市長 から寄贈された震災記録 DVD が上映された。







2.近畿地区日独協会新年会 1月11日大阪梅田で 開催され、当会より林理事、上田賀代子さん、水野 恵理子さんの3名が出席した。

●「バイエルンとアルザスのクリスマス・マーケッ ト訪問記」を会員の武舎一夫さんから頂きました。 「私は郵船ロジスティクス社に1979年に入社した 後、1984 年から 1990 年までデュッセルドルフ駐 在としてドイツで暮らす機会を頂きました。ナチ ス・ドイツに追われて米国へ亡命した指揮者のブ ルーノ・ヴァルターは自伝の中で、「今響く昔の響 き、幸せも不幸せも歌となる」と言うようなこと を書いていますが、私のドイツ滞在ももう既に四 半世紀前のこととなり、すべてのことが懐かしい 思い出となってしまいました。中でも忘れる事が できないのは、ドイツ各地のクリスマスの美しい 光景です。私にとって、ドイツの長くて厳しい冬 の中で唯一の楽しみがドイツ各地のクリスマス・ マーケットを訪れることだったのですが、かつて 見たクリスマスの光景をもう一度確認したく突然 思い立ち、12月5日から10日間の日程でバイエ ルンとフランス・アルザスを訪問しました。今回 訪問したのは、ミュンヘン、ローテンブルク、ニ ュルンベルクとアルザスのストラスブール、コル マールの 5 箇所ですが、どの都市も長いクリスマ ス・マーケットの歴史に裏打ちされ、大変に美し いクリスマスの装飾に彩られていました」(詳細、同 氏のブログ: http://chevaliersanssouci.cocolog-nifty.com/)







コーテンブルク ニュ

ュルンベルク ストラス

●行事予定

ドイツ・チューリンゲン州の男声合唱団「アルス・ムジカ」一行が 4 月 12 日~21 日、日本各地でコンサートを行う。奈良には同 21 日来訪され図書情報館でコンサートを開催予定。詳細は後日当会よりご連絡します。

●会員だより

河野会長「6年ぶりドイツ訪問」

新年明けましておめでとうございます。巳年の春を健やかにお迎えになったことと存じます。会員皆様方にとりまして、本年が良き年でありますようお祈りいたします。さて、昨秋10月24日から30日まで6年ぶりにドイツを訪問しました。日独修好150年を記念した日独友好賞(ルフトハンザ往復航空券)を頂戴したのを機に、関係2カ所を訪問するべく、娘との2人旅でした。







1つはヴィースバーデン近くのベーリンガー・インゲルハイム製薬会社。この会社は国際的な大企業ですが、本社は創業者の故郷であるインゲルハイムというライン川沿いの片田舎にあります。オーナーファミリーとは先代住職(初代会長)からのつきあい。その縁で日本ベーリンガー社は毎年拙寺で会社の慰霊法要を行っています。オーナー会長のクリスチャン・ベーリンガー氏の出迎えを受け、立派なゲストハウスで分厚いステーキとワインのもてなし。夜には父親のオットー氏も加わり、ヴィースバーデンの丘の上の瀟洒なレストランでディナー。楽しい語らい(勿論通訳を介して)と共に、豪華な馳走に胃の腑も驚いたことでした。

翌日、小雨に煙るライン下りを楽しみ、次の訪問地であるケルンへ。ケルン独日協会会長のマイト氏ご夫妻の先導により、先代の分骨をしているメラーテン墓地に墓参り。次いでケルン大学ラインシュタイン学士会の日本訪問 50 周年式典に参加。100 名ほどの熱気に溢れた会場には、日本訪問時の記録映像や写真が流され、50 年前の参加者も懐かしげ。当時の拙寺での歓迎ぶりも紹介されました。今年3月にはラインシュタインとして約10年ぶりの日本旅行が計画されています。ほとんど観光する暇もなく、慌ただしくかけ回った感の旅行でしたが、娘と二人、ドイツをそれなりに楽しんできました。